

目的 国境の孤島であり、交通の極端に不便であった対馬に、古い農作業着が残っており、その製作にたずさわってきた古老が生存しているうちに、聞きとり調査をしたいと考えた。ここは、山の島であり、陸上の農作業の着物をやまぎもんと呼んでいた。かつては大陸との交通の大道でもあったこの島に、大陸の影響もあったかとも考えられるので、その点にも重点をおいて調査した。

方法 昭和63年（1988）から平成元年（1989）にかけて、数回にわたり対馬をたづねて調べた。上県郡上対馬町鱧浦はこの島の最北端にあり、韓国の釜山までわずから3キロメートルしか離れていない国境にある。豆殻は、下県郡厳原町にあり、ここは津津の意味を持って名付けられたともいわれる南端の港であり、ここは中国から日本に渡る寄港の地として古代から利用されてきた地でもある。椎根は同町の佐須地域にあり、対州鉾山のあった地に隣接し、島外の人々との交流も多かったところである。

結果 構成上ではすべて和服の長着形式のものが主役であった。鱧浦で昭和30年代まで麻を栽培し、「うわずり」というやまぎもんを織っていた。これが南部の豆殻では、のぎもんと呼ばれていた。ここではとうじんぎもんとも呼び、その袖を細くし、また動作に不自由が生じるためまちを入れて機能性を加えたものとなっていた。木綿の栽培が九州で広まり、端布を重さで買えたため、パッチワーク形式の接ぎ合わせのとうじんぎもんも広まった。袴のやまぎもんはいづれも表と裏とあわせてひとえ仕立てとしていることも手入れに便利になっている。